

第1回 安心・つながりプロジェクトチーム 会議 議事録

(開催要領)

1. 開催日時: 令和7年2月20日(木)17:00~17:30
2. 場 所: 中央合同庁舎8号館4階410会議室
3. 出席者(構成員):
 - 石田 光規 早稲田大学文学学術院文化構想学部教授
 - 大西 連 内閣府孤独・孤立対策推進参与
(特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい理事長)
 - 勝部 麗子 社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会 事務局長

(議事次第)

1. 開会
 - ・三原内閣府特命担当大臣挨拶
2. 議事
 - ・プロジェクトチームの開催について
 - ・現状の整理・論点について
3. 閉会

(配布資料)

- 資料1 安心・つながりプロジェクトチームの開催について
- 資料2 安心・つながりプロジェクトチーム運営要領(案)
- 資料3 プロジェクトチームの進め方について
- 資料4 現状の整理・論点について
- 参考資料1 第5回地域共生社会の在り方検討会資料1(抜粋)
- 参考資料2 石田構成員提出資料
- 参考資料3 勝部構成員提出資料

○事務局(江浪室長):定刻となりましたので、ただ今から、「安心・つながりプロジェクトチーム」第1回会合を開催いたします。

まず、本プロジェクトチームの構成員を五十音順に御紹介いたします。

早稲田大学文学学術院文化構想学部教授の石田光規さんです。オンラインでの御参加です。

内閣府孤独・孤立対策推進参与であり、認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長の大西連さんです。

大阪府豊中市社会福祉協議会事務局長の勝部麗子さんです。

それでは、三原孤独・孤立対策担当大臣からの御挨拶です。大臣、よろしくお願いいたします。

○三原孤独・孤立対策担当大臣 孤独・孤立対策を担当しております、内閣府特命担当大臣の三原でございます。本日は、石田さん、大西さん、そして勝部さんにおかれましては、お忙しい中、プロジェクトチームに御協力いただきまして、誠にありがとうございます。今後、我が国では単身世帯、そして単身高齢世帯の増加が見込まれ、孤独・孤立の問題の深刻化が懸念されており、こうしたことに備えた孤独・孤立対策の在り方を検討するため、このプロジェクトチームを発足することといたしました。

私自身、先月、能登地方の仮設住宅と神奈川県藤沢市の多世代交流賃貸アパートなどを視察し、お住まいの方や、そうした方々のための居場所づくり・つながりづくりを行っている方々と意見交換を行い、孤独・孤立を予防するための取組をお聞かせいただき、改めて大変重要な施策であると実感いたしました。

このプロジェクトチームでは、そうした多世代交流の視点も含めたつながり・居場所づくりが重要との認識の下、長期的な視野に立ち、現役世代も含めた単身高齢者等の孤独・孤立状態の予防の観点から、必要な取組について検討を行うこととしております。つながり・居場所づくりの支援の現場の方々などからもヒアリングを行いながら、本年夏頃に議論の取りまとめができるように、それまでにしっかりと議論を深めたいと考えております。

構成員の皆様におかれましては、御専門分野の御知見をいただきますよう、幅広く活発な御議論をいただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局(江浪室長) ありがとうございました。孤独・孤立対策担当の、友納内閣府大臣政務官も御参加です。一言、よろしくお願いいたします。

○友納内閣府大臣政務官 皆さんこんにちは。孤独・孤立対策を担当しております政務官の友納でございます。私元々看護師でございますので、病院を見ていると、単身の高齢者の方が増えてきているということをしごく実感をしております。地域のつながりや居場所があれば、ここに至るまでに入院ができて、もう少し早く退院ができたのではないかと、もう少し早く退院させて差し上げることができたのではないかと、そういったことを感じることもありますので、地域でのそういったつながり、多世代もそうですし、高齢者同士もそうですけれども、人の役

に立つことってというのが生きていく上でとても重要なことだと思いますから、そういったことができる場所を作ることができればと思っております。

あと、私の一つの関心事としては、今回高齢者ということですので、やはり体調が悪いと外に出ないとか、医療は厚労省なのかもしれませんが、ただ医療と隣り合わせの中で、住み慣れたところで生活をするという視点においては、「ノビシロハウス」を見させていただいたときに、2階に訪問診療と訪問看護のところも一緒にあったんですね。そういった医療や福祉が隣り合わせにあることで、地域でしっかり安心して生活ができるのかもしれないので、そういった少し広い目線で取り組んでいくことができればと思っております。

しっかり取り組ませていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○事務局(江浪室長) ありがとうございます。プレスの方は、ここで退出をお願いします。

(報道関係者退室)

○事務局(江浪室長) 配布資料は、資料1から資料4、参考資料になります。本プロジェクトチームの運営ですが、資料1の「4 その他」にありますように、会議の運営に関する事項は、プロジェクトチームが定めることになっており、資料2が、その定めになります。

「議事及び会議資料は原則として公開する」こと、また、「会議での議論についても、原則として議事録を作成して公開する」とことといたします。よろしくお願いします。

それでは議事に入りたいと思います。ここから先、本プロジェクトチームの司会進行は大西参与をお願いいたします。

○大西参与 本プロジェクトチームの司会進行を務めさせていただきます大西です。よろしくお願いいたします。

まずは、本日の議事に関して、事務局から、資料3及び資料4について説明をお願いします。

○事務局(江浪室長) 資料3を御覧ください

本プロジェクトチームの進め方についてですが、資料にお示した課題認識の下、現役世代を含めた単身高齢者等の方々の現状・課題を把握するため、学識経験者や関係省庁、地域における取組の担い手などからのヒアリングを予定しております。

チーム会合を月1回程度開催し、夏頃の議論の取りまとめを目指し、ヒアリング等を通じて把握した課題に対して、政府全体としてどのようなアプローチをとっていくべきかについて、「孤独・孤立対策の在り方に関する有識者会議」や厚生労働省で行っております「地域共生社会の在り方検討会議」との連携も意識しながら、検討してまいります。

資料4 1ページを御覧ください。孤独・孤立対策については、昨年施行されました孤独・孤立対策推進法や重点計画に基づき、孤独・孤立対策担当大臣が司令塔となり、全世代型の対策を推進しつつも、孤独感が高い若年層へのアプローチを意識しておりまして、こうした取組は今後もしっかりと継続してまいります。

2ページを御覧ください。国立社会保障・人口問題研究所が行っている推計ですが、今後、単身世帯や単身高齢世帯が増加し、2050年には全世帯の44.3%が単身世帯に、単身世帯の約半分に当たる全世帯の20.6%が単身高齢世帯になると見込まれております。

3ページを御覧ください。当室で実施している実態調査結果ですが、世帯構成別の孤独感を見ると、ひとり世帯の孤独感が、他の世帯構成に比べ、高くなっております。

4ページを御覧ください。単身世帯の増加により、身体機能が衰える高齢期に他者との接触が少なくなった結果、孤独・孤立のリスクを抱える単身高齢者の方が増え、結果として「孤立死」に至る方が増えてしまうことが懸念されます。また、現役世代も含め、将来高齢期に孤独・孤立の問題を抱え得る方が増えることも懸念されます。

こうした課題に対して、現在、日常生活支援や意思決定支援といった必要な枠組みの構築が関係省庁により進められており、こうした関係省庁の取組について、孤独・孤立対策の視点からも引き続き推進していく必要があると考えております。

こうした認識の下、本プロジェクトチームにおいては、長期的視野に立ち、現役世代も含め、単身高齢者等の孤独・孤立を予防していく施策を適切に講じていく観点から、どのような支援が必要と考えられるか、皆様に御議論・御検討いただきたいと考えております。

その際、当事者と支援者の双方の視点に立ち、「多世代交流の視点も含めた多様な居場所づくりの促進や担い手の確保」、「受援力を高めるための個々人の意識醸成に向けた取組」、「支援につなげることが難しい方に支援を届けるための取組」などについて、御議論を深めていくことはどうかということで、事務局から案をお示ししております。事務局からは以上でございます。

○大西参与 ありがとうございます。友納政務官は、公務により、ここで退席されます。ありがとうございます。

(友納内閣府大臣政務官退室)

○大西参与 それでは、構成員の皆様からそれぞれ4分程度で御意見を伺いたいと思います。まずは、対面で出席されております、勝部さんからお願いいたします。

○勝部構成員 大阪から参りました豊中市社会福祉協議会の勝部と申します。本日は、よろしくお願いいたします。今年は阪神淡路大震災から30年の年で、実は私の町も30年前は、知っている人が知っている人を助けるだけのそういった災害支援でした。あまり神戸のことが大きかったので、あまり皆さん御存じないかもしれませんが、家屋の被害が大きく、本当に大変なことだったですけれども、先ほど能登に行かれたという話がありましたが、結局、避難所から仮設住宅、仮設住宅から復興住宅に移るたびにコミュニティ、つながりが切れてしまって、孤独死がたくさん起きてしまった。その反省に立って、この30年間、一人も取りこぼさないということを考えて、災害時のつながりづくりであったり、日常のつながりづくりを進めてまいりました。大阪北部地震がもうじき7年前になりますが、そこでは4時間で1万2000世帯の見

守りを私の町では実現できました。そのとき、マンション群では「無事ですカード」を皆さんに貼ってもらって、自分が無事なときには、まず無事と表明してもらうと、この人は大丈夫、次の家に行ける、といったような、そういうツールを作り、その後も普及をさせているのですけれども、豊中市はマンションが管理組合はありますが、基本的なモデル規約の中にも自治会は作らないでよい、といったような書きぶりになったことで、マンション群の繋がりがとても弱まっています。私達はマンションサミットということで、管理組合の人を集めていろんな交流をしたり、訓練をしたりということもやっていますが、もちろん地方も高齢化で大変なんですけど、都市部においては本当にそういうことを考えていかないと、直下型地震とか南海トラフとかいろいろなことが言われている中で、とても厳しいと思っています。

いろいろ発見したものを解決するために、20 年前にワンストップで解決するという、コミュニティソーシャルワーカーというのを設置して、そこで出てきたのが、ごみ屋敷、ひきこもり、8050 問題、ヤングケアラー、こどもの貧困などであり、いずれも社会的孤立が背景にあるということを実感するようになりました。

私はこの社会的孤立を解決するためには、ひとりぼっちを作らないっていうことが、一番大事なことだということで社協のコンセプトとして今進めているのですが、四つのことが気になっています。

一つ目は一人暮らしの高齢者です。大型ゴミが捨てられない、電球交換もできない、そういうことで困ってる方もいれば、入院したいと思っても保証人がいない、入所したいと思っても、連絡先になってくれる人がいないとか、身寄りがないために死後事務を誰かに委ねないといけないということで、いまはそういったビジネスがたくさん出てきている。お金持ちの人は、100 万、200 万払って、沖縄の海に散骨してもらうそういったビジネスもあるかもしれませんが、人間はずっと生まれて死んでるっていうのは、もうこの世が始まってずっと続いているはずなのに、もう今や、死ぬっていうことを社会化しないといけない。看取りということを社会化するようなことが求められているというのが、とても不安な気持ちであります。

二つ目が老老介護です。老老介護は特に男性の介護者がとても大変です。弱音が吐けないという問題があって、介護ができない、弱音が吐けない、「お父さん大丈夫」と聞かれても、「大丈夫」と答えるものの、実際は全然大丈夫じゃないということが、よくあるんですけど、こういう弱音を吐けない男性方をしっかり、介護保険は本人はサポートしますが、介護者へのサポートはありませんので、そこをオレンジカフェというのが認知症の方々が集まるような場所を作ると、病院もちょっとずつ離れるようになってるんですけど、こういったものをしっかり作っていく必要があるかなと思っています。こういうのがないと、介護心中であったり、委託殺人であったり、怖い話が後をたたないと思っています。

三つ目は 8050 問題です。親が 80 歳で、50 歳の無職の息子や娘という御家庭があるということを審議会で言い出して、もう 10 年経ちます。そのため、今では 9060 です。9060 になると親が亡くなったり、入院したりしてるので、生活力がない 60 代の人たちが家に取り残されていて、ゴミ屋敷状態になっていたりとか、SOS を出せないまま、孤独死をしたり。

我々の町でもこの夏、認知症になりそうになったごみ屋敷にいらっしゃる方たちを発見して、地域の人たちを救出したりという事案がいくつもありましたが、ここの入口が不登校から始まっていることが多いので、私達は学校と福祉の連携、不登校の時期にしっかりとつながっていることが、その後の支援を繋げていくことになるのではないかなと思っています。

最後、四つ目ですが、定年後の男性の問題です。豊中は定年後の男性向けの取組をやっていますが、地域の方が無償で土地を貸してくださって、9 か所で 180 人の男性が野菜作りと地域作りの担い手になっています。作った野菜をこども食堂に届けたり、それを移動販売で買物困難地域に行き、安否確認をしたり。実はおじさんたちの中には外国でお仕事してた人もいて、英語が堪能で外国人を支援するような人たちも出てきてます。先ほど政務官がおっしゃったように、何か支援を受けるという、今までのコンセプトではなくて、出番づくりってものをどうするのか、ということを考え方の意識の変換をしないと、これからやはり必要とされていないってことで、葬ってしまう人たちが増えるんじゃないかなという気持ちがあります。

最後にもう一つあるのが、今までは男性の孤独の問題を取り上げていたが、女性も男女雇用機会均等法世代からあとは皆働いているので、地域とつながりの無い方が増えていきます。これからは、社会と繋がりを作らなかった人たちに対してどんなプログラムを作っていくかということと、そして、そういう方々が地域の中で活躍できることをもう一つ考えていくということが重要だと思っているんですけど、今、団塊の世代が 75 歳になって、あと 5 年ぐらいは地域活動を担っていただけたと思いますけれども、あと 5 年ぐらいの間に新たな方法を考えないと、人口減少で仕事がずっとありますから、70 歳になっても 75 歳になっても、皆働いているときに、「地域共生社会」という助け合いみたいなことをする人が、本当に世の中にいるのか、という危機感もあります。ですので、企業にも人がおらず、地域にも人がいないので、地域に当たり前にもう一つの居場所を作るというライフスタイルに変えていかないと、何もかもが会社で終わるみたいなことになりはしないかという懸念があります。以上です。

○大西参与 勝部さん、ありがとうございました。私も豊中に行かせていただいて、支援する、支援されるではなくて、支え合うという関係で、新しい役割、関係性を、会社ではない地域でどう作っていくかレビューさせていただきました。

○勝部構成員 今まで共生社会じゃなくて競争社会だった人たちが、助け合うっていうことを意識変換することが、結構難しくて、そこを工夫するととっても皆さん活躍されています。

○大西参与 ありがとうございます。続きまして、オンラインで参加されている石田さん、お願いします。

○石田構成員 改めまして石田です。私は、孤独・孤立の問題を、結構古くから研究しておりまして 2005 年ぐらいから、焦点を当てて研究をしてまいりました。2020 年ぐらいから行政で

も注目をしてきたわけですが、おそらく率直な実感としては、孤独・孤立の問題は、実は入口に立ったばかりで、これから本格化していくのではないか、と思われます。

そこで短期的な問題と中長期的な問題と二つあると考えておりまして、短期的な問題は、まさに冒頭の御説明にもありましたように、高齢者の問題です。75 歳以上の団塊の世代が高齢化、75 歳以上の場合で単身世帯になっていくとなると、孤立死に類する案件がいよいよもう回らなくなってしまう。そういった方々をどうするのか、医療福祉関係がどうなっていくのか。現場で悲鳴が上がっていくってということもよく聞いておりますので、そのあたりの対応は、喫緊の課題になるのではないのかなと思います。こちらに関しては厚生労働省さんが主にやっていくということなので、私はおそらく事前説明を受けた限りでは、そういったところと連携をしていきながら、いろんなことをやっていくところであると認識しております。

もう一つ中長期的な問題として考えられますのは、こちらも冒頭の説明にもありました、いわゆる中堅層以降の方々の世代です。実は孤独・孤立の問題は、こちらの方が深刻になる可能性が高いと私自身は思っております。なぜかといいますと、例えば 2020 年時点での 50 歳時未婚率が、男性で 3 割弱、女性で 2 割弱となっております。かなりの数は結婚していない。なおかつ 2020 年というのは、団塊ジュニアというのが、そのあたりの年代に当たりますので、人口ボリュームも非常に多いわけなんですね。そういった方々が、家族がいないまま、これからいよいよ高齢期を迎えようとしている。実際に社会調査を見ていきますと、困ったときに誰が誰に頼るのか、人は誰に頼ってるのかっていうのを見ていくと、基本的には配偶者、親、子供の一親等がものすごい強い力を持つのが日本社会の実情でありまして、結婚しない人は、結局どうになってしまうのかということ、一親等が親以外にいないというわけなんですね。

かつてであれば、親も若いので親に頼れたかもしれないですが、本人が 50 歳を迎える頃は、いよいよ親の 70 代 80 代になってまいりますので、そういった方々の、なおかつ、人口ボリュームが多い方々がいよいよ高齢期を迎えるとなると、日本社会として初めて直面する問題なので、こういった方々が、より深い孤独・孤立に陥るということは、人口動態はほぼ外れないので、ほぼ間違いないと考えられますので、こういった方々をどうしていくのか、多世代連携でどうすくい取るのか、ということが問題になるのかなと考えております。

日本社会のつながりに関する課題というところで、事前に資料をお送りしましたので、こういった課題がありますということをお示しいたします。

私から投影いたします。画面御覧になれますでしょうか。

つながりフレイルという言葉を使っております。私は、よくエスカレーターの例を用いて、例えておりまして、どういうことなのかというと、階段とエスカレーターという選択肢がある場合、基本的には健康者は、階段を選んだ方がいいわけです。筋力が鍛えられますし、日常歩いていた方が体にいい。ただ階段は疲れてしまうので、エスカレーターと階段というものが併設されていると、基本的にはエスカレーターを皆使ってしまう。ただエスカレーターを使ってしまうと筋肉はどんどん落ちるので、そうすると、ますます階段を使いたくなくなってしまう。それによって筋力が落ちていくと、やはりフレイルのリスクが拡大するという形になりますので、階段と

エスカレーターという二つの選択肢があったときに、いかに主体的に階段を使ってもらおうかということが体力維持、健康維持のためには重要になってくる。

これと同じことが実はつながりにも当てはまっており、どういうことかといいますと、基本的に今の私達の社会は、一人で楽しむための選択肢が非常に多いわけです。一人でいることと、誰かとつながるという選択肢を二つ用意した場合には、もう私達は一人で十分に生活できるようになってしまったし、十分楽しめるようになってしまったと。

つながることってというのは、確かにそれは楽しい側面ってというのはありますが、その一方でとても面倒であるもめごとが起きるかもしれないし、何か面倒くさい、そもそも外に出るのが面倒くさいっていう人もいるかもしれない。準備をしたり、気遣いをしたり、調整するのが面倒くさいという方もいらっしゃると思います。そうするとこの二つが選択肢として登場した場合に、どうになってしまうかという、基本的につながると面倒くさい、わざわざ外に行くの面倒くさいから、だから一人で楽しめばそれでいいか、となってしまうことが結構多いです。

そうすると何が困るのかといいますと、先ほどのエスカレーターの例と同じで、いわゆるつながるための筋肉、筋力みたいなものが、どんどん落ちていってしまうわけです。ですから、つながらないことに慣れてしまって、一人でいることに慣れてしまう。そうすると、ますますつながることが億劫になってしまって、人とつながる筋肉が落ちてしまって、ますます人と会わなくなる。ますます人と会わなくなると、さらに人と会うというのが面倒くさくなってしまうので、結果として「つながりフレイル」みたいな状況になってしまうということが、今後、予測できますので、今回のプロジェクトチームでは、基本的に、深刻な事例に関しては厚生労働省さんをお願いをして、こちらではどうやってつながりを育むのか、ということがメインの話題になると伺っておりますので、「つながりフレイル」に陥りがちな人を、いかにすくいあげていくかということが課題なのではないのかなと。これはおそらく今後日本社会においても大きな課題であるのではないのかなと認識をしております。私からは以上です。

○大西参与 石田さん、ありがとうございました。最後に私から発言をさせていただければと思います。私は、2021年の6月から当時の内閣官房で、現在は内閣府で孤独・孤立対策の参与を務めておりますが、もともとNPOの人間でして、「もやい」という生活困窮者の支援を行っている団体なのですが、色々な活動やってる中に生活困窮者の相談支援とか、食料品の配布などいろいろやってるんですけど、居住の支援、保証人を延べ2400世帯やっているだとか、緊急連絡先を1300世帯、自分の携帯でやってたりするんですけども、まさに身寄りのない問題に直面しております。まさに高齢者もちろんですけど、若い方であっても、身寄りがなかったり、御家族との関係性がDVや虐待などのいろいろな背景があって、身寄りがなく、帰る先がないという方がたくさんいらっしゃるのではないかなと思います。

先週なんですけれども、ずっと関わっていた70代の方から急に久しぶりに電話があって、なんだろうと話を聞いてみたら、その方は固定電話を解約しようと思ったらしいんですね。その方は、年金と就労でまだ頑張ってるんですけど、固定電話の解約を自分でやる

うとも思ったが、全然自分できないと。コールセンターに電話しても繋がらない、インターネットでやれるらしいが、やり方がわからないみたい。それが 1 年半ぶりぐらいに連絡が来たらそれかみたい。一緒にやって差し上げたんですけれども、なんかそれって、その方は別に介護保険を使う状態でもないですし、何か福祉的な既存の制度や仕組みの中で支えられる状況の方ではないんですけど、本当にちょっとした日常のささやかな困りごと、「ちょっとこれを手伝ってほしい、ちょっとこれを教えてほしい」みたいなことを頼れる方がいない、御家族がいらっしやらないという話もありましたし、地域の知り合い、つながりもない。支援ってなると、まさに既存の施策制度となると、もう一定以上の能力が落ちていたり、医療的な判断があってそういった支援にたどり着くといったことはあるかと思いますが、その手前のところが、今の制度や仕組みの中で、まだまだ足りていないところがある。ただ、その手前でうまく支え合える仕組みを作れるとですね、福祉的な領域にたどり着くまでをちょっと時間を遅らせたりだとか、元気な状態を維持できたりっていうことがもう少しできるのかなというところは、これは国のいろんな仕組みの部分もあれば、民間のいろんな取組もあれば、民間の取組をどう応援していけるのかとか、それから今足りない部分の民間の取組をどう作っていけるのかも含めて様々な議論の余地がある領域かなと思っています。

孤独・孤立対策はかなり幅が広いテーマだなということをいつも思っているんですけども、孤独・孤立対策の一番の特徴は、官民連携、協働、分野を超えていろんな人たちが取り組むというところが特徴かなと思っています。それこそ大臣と政務官と御一緒した藤沢の取組も、高齢者向けの住宅だけれども、若者も一緒に隣に住んでいて、気づいたらお互い支え合っているとか、気づいたら支え合えるような仕組みとか仕掛けを今頑張ってるところがあるので、それをどう応援できるか、それから、そういう仕掛けを意識的に作るためのメソッド、ノウハウみたいなものがあるんだったら、それをどうやって、色々な方にお伝えできるのかとか、そういった仕掛けを作っていくために必要な国や自治体のルールの変更が必要なんだたら、それをどうできるのか、など色々な視点があろうかと思いますが、是非この会合で、そういったことも議論しながら、各省庁の取組へのインプットもそうですし、政府や自治体、それから民間の人たちでいろいろ議論して提言ができればいいかなと思っています。私からの発言は以上となります。

今日、勝部さん、石田さんにそれぞれ御発言いただきましたが、ぜひ引き続き御発言いただけたらなと思っています。次回以降、論点に沿った検討を深めていければと思います。時間が来てしまいましたので締めくくりに、三原大臣に一言いただければと思います。

○三原孤独・孤立対策担当大臣 本日は、限られた時間の中で、皆様からこうしたお話を伺うことができまして、本当にありがとうございます。

今日は第 1 回目ということですので、お互いの意識を合わせられたらと思いますが、私、実は、この「安心・つながりプロジェクトチーム」というネーミングにすごく悩みまして、本来、役所で作るようなプロジェクトチームだと、単身高齢者なんか、独居なんか、孤独・孤立プロジ

エクトチームみたいな名称になりそうなんですけれども、先ほど石田様からお話あったように、厚労省によりすぎず、年代も超えて、課題も様々で、せっかく内閣府にいるんだから、全部横串を刺してしまおうじゃないか、どこも全て関わっていいんじゃないか、それこそ大西参与のなさっている住居の保証人関係のことなど、お悩みって尽きないと思うんですね。

勝部先生からの不登校から始まっているというお話、私もそのとおりだと思うんですね。若者から、就職氷河期と言われている 50 手前の方々の問題も非常に深刻だと思います。

50 代の、定年前の孤独・孤立の予防ということを社会全体で、もう少し皆さんが考えるような、そんな施策を打ち出していけないかなと考えて、このプロジェクトチームを無理やりですけど立ち上げさせていただきました。

孤独・孤立対策は、日本が最先端だといったような話もありますが、やはりもっと日本らしい孤独・孤立への寄り添い方が私はあると思うんですね。

それこそ地域作りというお話が出ましたけど、自治会、町内会との関わりとか、そうしたものも含めて、もっと考えられることがあるのではないかと思いますので、ぜひ専門家の先生方の叡智を繋げていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○大西参与 ありがとうございます。時間となりましたので、本日の会議を終了いたします。

本日はありがとうございました。

(以上)